

神に愛され、神を愛する

ヨハネ 21:15～17

2週間前の4月9日に今年のイースターを共にお祝いいたしました。今日はその後、イエス様が弟子たちを出身地のナザレに帰された時の話です。弟子たちが7人程いたのですがこの21章では特にペテロに重きが置かれて書かれています。ペテロが弟子としてもう一度新しい出発が出来るようにイエス様は関わってくださったのです。

主イエスが十字架にお架かりになる前、ペテロは最後の晩餐のおり、「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。…たとい、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」(マタイ 26:33、35)と誓いました。ところが、それから何時間もたたないうちに、ペテロは大祭司の官邸で「この人はナザレ人イエスといっしょでした」と言われた時、「そんな人は知らない」と三度もイエスを否認したのです。ペテロはイエスを否むという大きな罪を犯しました。しかし、イエスはペテロを見捨てないで、その罪の中から彼を取り戻そうとされたのです。

ナザレの村に帰されてから食事の後、主イエスはペテロに「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」と問われました。「ヨハネの子シモン」というのはずいぶん、改まった言い方です。彼はすでにペテロという名で知られていたのですが、ここでは正式な名前と呼ばれています。だれでも、苗字と名前を呼ばれば、立ち上がって、背筋を伸ばし、緊張して返事をしなければなりません。少なくとも日常会話や世間話ではないということです。しかも「わたしを愛していますか」というときに使われていることばは「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。」(ヨハネ 3:16)というところで使われているのと同じことばです。大きな愛、真実な愛、献身的な愛、犠牲的な愛を指しています。イエスは、ペテロに、真剣に「わたしを、ここから、命がけで愛しますか。」と問いかけておられるのです。人は神に問い、神はそれに答えてくださいます。同様に、神もまた人に問いかけられます。そして人はそれに答えなければなりません。「人が神に問い」、「神もまた人に問いかける」、ここに神と人とのまじわりがあります。礼拝がまさにそのような場です。

ここでイエスはペテロに「あなたはわたしを愛していますか？」と三度同じことを言われました。これは、ペテロが三度イエスを否定したことと関係があります。また、「ヨハネの子シモン。あなたは、この人たちが愛する以上に、わたしを愛していますか。」(15節)と言われたのは、ペテロが「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」つまり「私はこの人たち以上にあなたを愛しています」と言ったことと関係があります。確かにペテロは、イエスを愛していました。他の弟子の誰よりも愛していました。しかし、その愛を貫き通せなかったのです。通せないどころか裏切り、逃げてしまったのが現実です。ペテロは自分の罪深さを知っていましたから、イエスからそう問われたことで「心を痛め」(17節)しました。当然でしょう。自分の人生の中の大きな黒歴史、つまり自分が持っている愛の弱さと脆さが露呈したわけですから。しかし、イエスがペテロに「あなたはわたしを愛していますか。」と問われたのは、ペテロの罪を責めるためではありません。また、イエスがペテロを赦す前に、ペテロにもう二度とあんなことはしないとイエスへの完全な愛の誓いを要求する意味で質問されたのでもありません。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。」(ヨハネ第一 4:10)という聖書のことばのとおり、ペテロがイエスを愛する以前にイエスはすでにペテロを愛しておられます。ペテロがイエスへの愛を告白する前に、イエスはすでにペテロを赦し受け入れておられたのです。

イエスがペテロに「あなたはわたしを愛していますか。」と問われたのは、「そんな簡単にあなたの失敗を何も無かったようにはしないよ。ちゃんとあなたのしたこと、言ったことは覚えているよ」という意味で皮肉を込めて言われたものではありません。それと真逆です。イエスがペテロを愛しておられることを知らせるために言われたのです。子どもはときどき、「お母さん、ぼくのこと好き?」「お父さん、わたしのこと好き?」と聞きます。それは、母親や父親の愛を確かめるためだけでなく、こう尋ねることによって母親や父親に「ぼく、お母さん大好きだよ。」「わたし、お父さん好きだよ。」と、自分の愛を伝えようと

しているのです。誰も自分が愛してもいない人に向かって「私を愛していますか。」などと聞く人はいません。こんなにお母さんのこと、お父さんのことを私は大好きだから、お父さんお母さんにも言って欲しいのです。「私もあなたのこと大好きだよ」と。ここで「あなたはわたしを愛していますか。」と問うことによって、イエスは「ペテロ、わたしはおまえを愛しているよ。わたしはおまえを赦しているよ。」と宣言しておられるのです。そしてペテロが「私はあなたに愛されていることが分かります」という答えを言うことを待っておられるのです。こんな時に私たちからよく出てくることばは「私には『愛してます』と言う資格はありません」あるいは「私のあなたに対して犯した大失敗が分かっているが『愛してますか』と聞くなんで、嫌みではありませんか」とことでしょう。ひょっとしたら喉元過ぎれば熱さ忘れるがごとく、ケロッと「もちろん私はあなたを愛しています」と言うような人もいるかもしれません。

そんな風に私たちが考えてしまうのはそれなりの理由があります。昔も現代も私たちの生きている世界は「要求してくる社会」です。「要求してくる社会」とは（～が出来たら認めるが～が出来ないのであれば認めない）（～を持っていたら受け入れるが、持っていないなら受け入れない）そういった価値観で生きる世界です。「これをしなさい。」「失敗してはいけない」と常に要求があって、「あれしなければならぬ、これをしなければならぬ」と心がせつつかれています。そして、それが出来ないと私は受け入れてもらえないと考えてしまうのです。ですからペテロはイエスの弟子としては最高の弟子であろうとし、イエスを愛することにおいては一番だと思っていたわけですが、そこでイエスを愛せないどころかイエスの存在を否定するような最低なことを言ったわけですから、面目丸つぶれ、ペテロの心はどん底状態だったと思います。

さて「本当の愛は、いつも双方向」です。神は私たちを真剣に愛しておられるので、神は私たちに「わたしを愛するか」と問うて、私たちが神を愛することを求めておられます。ペテロは「わたしを愛するか」との問いかけに、「はい。主よ。私があなただを愛することはあなたがご存知です。」と答えました。これは、いかにも自信のない答えで、ペテロのイエスへの愛が不確かであったかのように聞こえます。しかし、イエスの問いにペテロははっきりと「はい。」と答えていますから、これは謙虚ですが、確かな答えです。以前のペテロは、イエスが「あなたがたはみな、今夜わたしのゆえにつまずきます。」(マタイ 26:31)と言われたとき、「いいえ！」と答えました。「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。」と言って自分の弱さを否定し、イエスのことばを否定しました。ペテロは大祭司の官邸の中庭で「いいえ。私はイエスを知らない。」と言う以前に、すでにイエスのことばに「いいえ」と言っていたのです。また、ペテロは「たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。…たとい、あなたと一緒に死ななければならぬとしても、あなたを知らないなどとは決して申しません。」と言っていたのです。ペテロはその時点では自分の弱さを受け入れず、「私」、「私」、「私」と、「私」を主語にして語っていました。私は弟子として誰よりもイエスを愛することが出来るという自信とも言えます。これは言うなら「ひとりよがりの愛」ですね。よくドラマで家庭で浮いたお父さんが「私はこんなに家族を愛している。こんなに働いているのになぜ文句を言われなければならないんだ。」と自分を受け入れようとしない家族を非難する場面が出てきます。真面目なだけにある意味悲劇ですよね。今日の場面に戻りますが、ここでは「あなたがご存知です。」と、「あなた」が主語になっています。以前のように「この私が…」という気負いや、「私にかぎっては…」という間違っただけの自信はありません。つまりこの表現の意味するところは自分の力でイエスを愛するというのではなく、イエスの赦しの愛を受け入れ、その愛によってイエスを愛することをペテロは学んだということです。つまりイエスの問われた「わたしを愛していますか」を「わたしがあなたを愛していることを受け入れますか？」とペテロは聴けるようになっていたということです。このプロセスはペテロを過去の失敗から完全に解放するために必要なことでした。ペテロが過去の失敗をいつまでも引きずらないで、前に向かって進み出すために必要なイエスからのことばでした。このやり取りがなければ、ペテロが「この前はほとんどもないことをしてしまいました。深く反省しています。二度と同じような間違いはしません。」と元気いっぱい言ったところで恐らく同じような失敗をされるとおもわれま

す。なぜなら、自分が頑張ればとか、自分の心がけ次第といったように自分のがんばりで打開できるという思い込み。言うならば一方通行の愛、ひとりよがりの愛だからです。

私たちの神は赦しの神です。私たちの聞いている福音は罪の赦しの福音です。それなのに、なんと多くの人が過去の罪や失敗にいつまでもこだわり続けていることでしょうか。神が赦してくださっているのに、自分を赦していない人がなんと多く、神が受け入れてくださっているのに、自分を受け入れていない人がなんと多いことでしょうか。「本当の自分はこんなものではない」と思う人は自分を受け入れられない人と言えますね。「やすやすとこんな自分が赦されるはずがない」と考える人は自分を赦せない人ですね。そして自分を赦せない、自分を受け入れられないという人は、きまって、他の人をも赦し、受け入れることができません。そして、そのことで苦しみ、悩んでいるのです。そこから解放されるために、私たちにはイエスのことばが、イエスの問いかけが必要なのです。それに聞き、それに答えることによって、救いと解放がやってくるのです。

イエスは私たちにも今日「あなたはわたしを愛していますか？」と問いかけておられます。「あなたは、わたしにちゃんと従ってこられるか。あなたはわたしのために一所懸命働くか。」イエスは、そんなことを問うておられるではありません。イエスが私たちに求めておられているのは、私たちの立派さや能力ではなく、主を愛する愛です。イエスへの愛を言い表わしたペテロに、イエスは「わたしの子羊を飼いなさい。」「わたしの羊を牧しなさい。」「わたしの羊を飼いなさい。」と言われました。ペテロが再び、十二弟子の中でリーダーとなり、教会に仕えることを許してくださったのです。4月に入り、奉仕表が出たり、各部の活動が始まったりと教会の活動が動き出しています。それに伴い、教会に仕える人々が必要とされています。教会の奉仕者にとって心にとめておくべきことは何でしょうか？今朝の聖書に、その答えがあります。教会の奉仕者にとって、ある程度の力なり能力は必要でしょうが、そのことよりも大切なことは「イエスへの愛」です。それも私のイエスへの愛、私の教会への愛の前に先ずイエスが私を愛して下さっているということ認め、受け入れることです。そしてイエスは、ペテロに対してそうであったように教会の世話をすることを、イエスを愛すると言いつづけた人に任せています。奉仕が自分のやりがいというよりもイエスへの愛を表わすためになされるなら、それはかならず実を結ぶものとなるのです。「主よ、あなたがこんな私をも愛してくださっているその愛をもってあなたを愛します。」そう言い表わして、教会に仕えましょう。今年の教会の指針はご存じのように「神を愛する者となる」でローマ8章28節が指針聖句です。しかし、この「神を愛する人たち」とは一生懸命がんばって神を愛する者となってゆこうと言うことではありません。「神を愛する者」とは「神に愛されていることを知っている者」という意味であり、神に愛されていることを知っているなら自ずと様々な形で、あるいは奉仕によって神に愛されている喜びを表してゆくこととなります。奉仕が喜びとなり、疲れたり、人のことばで落ち込んだりすることはありません。